區分

第一時　文字、書く、習、

第二時　ふ讀む。話す。

第三時　全部練習。

第四時　練習及び淸書。

敎授上の注意

(一)讀本第二十一課は、かきにて授けたる事項と聯絡して、讀方及び、意義を授くべし(既習の文字はその讀方及び、書方の順序方法を復習すべし)。

(二)讀本にて授けたる筆順、結構等を問答し、一字一畫宛筆法を示して模書せしむべし。

(三)練習せしむる際は、常に机間を巡視して個人訂正をなし、共通の誤謬は板上に示して、一般に訂正せしむべし。

(四)一句宛口唱して習はしめ且つ淸書せしむべし。

祭に就ては各地に於て行はるゝ鄕社祭などゝ比較して了解せしむべし。

第二十二　マツリ　(五時間)

要旨及文體

神祭の光景を叙したる叙事的記事文である。神祭の光景を想見せしめて、敬神の念を養ひ、參詣したる時の心得を授け、「森」「着」「宮」「面」「新」「客」「晩」等の文字、「ノボリ」「エマ」「花火」「ツレ」「ラレ」「ワアット」「ヤラ」等の文字語句、語法、修辞法等を練習し、記事文の形式を授くるのが主眼てある。

區分

第一時　(自六七頁三行　至六七頁八行)　大キナ字ヲ……アツンデキル。

第二時　(自六八頁一行　至六九頁三行)　オチヨト……ヲガンダ。

第三時　(自六九頁四行　至六九頁八行)　オ宮ニハ……エモアル。

第四時（自七〇頁一行至七一頁六行）オ宮ノ裏デハ……話デアル。
第五時（全課の總練習）

第一時

教材（自六七頁三行至六七頁八行）大キナ字ヲ……アソンデヰル。

要項

内容＝神祭の光景。

形式＝「森」「着」「ノボリ」「フダン」等の文字、語句。

教具　神祭の光景を描ける掛圖又は、挿繪の廓大圖。

教材解釋

内容

○**祭**　祭の起原は、重大なる史的事跡の紀念、天地、山川、草木に對する宗教心、若くは祖先崇拜等の宗教心より起れるものなりといふ。その國家の榮辱に關する祭典、即國民全體の祭祀と、一神社又は一個人の祭祀とがある。即ち大祭日靖國祭の如きは國民祭にして前者に屬し、一鄕一村の鎭守祭、個人の氏神祭の如きは後者に屬す祭は一時的のものもあれば又永久的のものもある。即ち普通行はるゝ神祭の如きは後者に屬し、明治三十年に行はれし東京奠都三十年祭の如きは前者に屬す。祭の種類は甚多し、小は鍛冶屋の鞴祭（フイトコマツリ）より、國家の大祭日に至るまで殆枚擧に遑なし。

神社の祭は、普通、春秋、二季に行はる。祭典の儀式は神社の格式、土地の習慣等によりて、一定せざれども、一般に神樂を奏し、神舞を行ひ、餘興として茶番狂言、舞踏道化踊（ドウケオドリ）、角力等を奉納す。

この祭祀といふことは、獨我國のみならず、古來世界の各國に行はれ、國民精神の涵養上、極めて重要の事に屬す。故にこれが教授の際は、敬神の念を養ふ樣に、訓話をし、國民思想の涵養に資せねばならぬ。

形式

(一)文字、語句

○**森**　木は其の形に象りたる字にして、森は木の多き貌を表はしたる會意文字、即ち、林に從ひ、木に從ふ。「森山」「森田」「金森」「杉森」「大森」「青森」

森
　音
　　漢「シン」
　　吳「ソン」
　訓
　　「モリ」
　　「サカンナリ」

着　音「漢「チョ」」「吳「ト」」　訓「「キル」」「「ツク」」

○**着**　本は箸字に作る、サに從ひ者に從ふ。あきらかの意を表はす指事文字なり。用例「着物」「上着」「下着」「中着」「夜着」。

○**ノボリ**　幟旗といひ、布の横に許多の乳をつけて、竿に通じて立つる長き旗。

○**フダン**　常の意、「フダン着」「フダンメシ」「フダン用」。

(二)文章解剖

(1)大キナ字ヲ書イタ大キナノボリガ立テテアル。（主・説）

イサマシイタイコノ音ガ森ノ中カラキコエテクル。（主・副詞句・説）

道ノ兩ガハニハアメヤ、オモチヤヤ、クダモノヤ、クワシヤナドガ店ヲナラベテキル。（主・副詞句・説）

子ドモハフダンヨリハ美シイ着物ヲ着テ、アソンデキル。（主・副詞句・説）

教法

(一)前課の復習。

(1)おちよのあねから、何といふ手紙が來たか。

(2)おちよは返事を何とかいて出したか。

(3)今日はおちよとお花が姉につれられてお祭に行つた所を學ぶべし。

(二)掛圖又は、挿繪の廓大圖を提出して、祭場の光景を談話す。

(三)教材の主要部を聽寫せしめて、「森」「着」の文字を授けつつ附屬部を修飾せしむ。

(1)大キナ字ヲカイタ大キナノボリガ立テテアル。（附屬部・主要部・説）

(2)イサマシイタイコノ音ガ森ノ中カラキコエテクル。（附屬部・主・説）

(3)道ノ兩ガハニハアメヤ、オモチヤヤ、クダモノヤ、クワシヤナドガ店ヲナラベテキル。（附屬部・主要部・説）

(4)子ドモハフダンヨリハ美イ着物ヲ着テアソンデキル。（主・附屬部・説）

(四)修飾したる文章につき讀方を練習し、意義の精究をなす。

(五)左の各項にき文字、語句及び、文章の讀解練習をなす。

(1)森村、森山、金森、杉森、青森、森田、大森、森川。

(2)下着を着る、着物を着る、美しい着物を着て入まんの森に行く。

(3)大キナ字ヲ書イタ大キナバシラガ立テテアル。小サナ字ヲカイタ小サナ紙ガハッテアル。

(4)オソロシイ鳥ノコエガ森ノ中カラキコエル。

(5)子ドモハイツモヨリハ美シイクツヲハイテアソンデヰル。

(六)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

(七)お祭り場所の光景につき問答して、話方を練習す。

(八)「のぼり」の圖をかゝしめてその名稱をかゝしむ。

第二時

教材（自六八頁一行至六九頁二行）オチヨト……鳴ラシテヲガンダ。

要項

・内容＝神社に參詣したる時の心得。

形式＝「宮」「面」「ツレラレテ」「オ宮ノ正面」「カハル〳〵」「ヲガム」等の文字、語句、語法。

教具　前時に仝じ

教材解釋

内容

○**神社に參詣したる時の心得**　神社の裝飾、建物等を毀はしたり、汚したり、他參詣人の迷惑になつたりする樣なことをしてはならぬ。神社に對して、充分に敬意を表して、拜せねばならぬ。又餘興等を觀覽する場合にも、公德を重じて、人に迷惑をかけぬ樣に注意するは勿論、妄に買食等をなして、不作法の振舞があつてはならぬ。

形式

(一)文字、語句、語法

○**宮**（ミヤ）　篆文の宮なり、宀に從ひ、室の形を表はせる象形文字なり。　宀呂分解用例「宮崎」「宮田」「宮島」「大宮」「二宮」「宮樣」

○**面**（メン）　本字は圓にして、首に從ひ人の面の形を象りたる象形文字、音漢昔ベン、呉

宮
- 音
  - 漢「キウ」
  - 呉「コウ」
- 訓
  - 「アレ」「ビト」「タヨル」
  - 「タビ」

音「メン」訓「カホ」「マミユ」「ムカフ」用例「面會」「面談」「正面」「平面」「文面」

○**ツレラレ**　「ツレル」はラ行下二段活用の第一變化「ツレ」にラレといふ所相の助動詞のつきて被役相となりしものであつて「伴ふ」意なり。

○**カハル〳〵**　互にかはり合ふ意の副詞なり、(疊語)用例「カハル〳〵湯ニ入ル」

(一)文章解剖

(1)オチヨトオハナハ（主）　アネニツレラレテ（副詞句）、オ宮ニ（副）　サンケイシタ。（説）

(2)（主）大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、（副詞節）　石ダンノ道ヲ上ツテ、（副詞節）　モウ一ツ（副句）　小サナ鳥居ヲクグルト（副詞節）（主）　オ宮ガ（説）　アル。

(3)オ宮ノ正面ニ（副句）　大キナ鈴ガ（主）　下ツテキル。（説）　サンケイスル人ハ（主）　皆（副）　カヘル（副句）

コレヲ鳴ラシテ（副句）　ヲガム。（説）

(4)オチヨモオハナモ（主）　鈴ヲ鳴ラシテ（副句）　ヲガンダ（説）

教法

(一)前時の復習(内容形式共)をなす。

(二)掛圖及挿繪につき内容の談話をし、左の文字、語句、語法を授けて講讀練習。

(1)宮、正面

(2)アネニツレラレテ、鳥居ヲクグルト、オ宮ノ正面、サンケイ、カハル〳〵ヲガム

(三)左の如く文章を解剖して、文の組立、語句の關係、意義の精査をなす。

(1)アネニツレラレテ（オチヨ／オハナ）ガサンケイシタ。

(2)大キナ鳥居ノ下ヲ通ツテ、石ダンノ道ヲ上ツテ、モウ一ツ小サナ鳥居ヲクグルト、オ宮ガアル。

(3)サンケイスル人ハ皆カハル〳〵鈴ヲナラシテヲガム

(4)オチヨ（オハナ）モ鈴ヲナラシテヲガンタ。

(四)左の各項につき文字、語句、語法の應用練習。

(1)宮田、宮崎、大宮、宮島、二宮、宮森、宮原、野宮、
(2)平面、正面、文面、上面、面會。
(3)私ハオトウサンニツレラレテサンケイシマシタ。
(4)オ宮ノ正面ノ鈴ヲ鳴ラシテヲガミマシタ。
(5)犬ガ太郎ニツレラレテオ宮マキリヲシマシタ。
(6)私ハケフ宮田樣ト面會シマシタ。
(7)大ゼイノ人ガカハル〳〵オ宮マキリニ來マス。
(8)「ツレラレ」「カハル〳〵」を使用して短文をかゝしむ。

(五)達讀練習。

(六)讀本の挿繪につき問答して、話方を練習す。

第三時

教材（自六九頁四行至六九頁八行）オ宮ニハ……エモアル。

要項

內容＝神社に奉納してある繪畫の種類。

形式＝「新」「エマ」「古イノモ、新シイノモ」「又」等の文字、語句、語法、假名遣。

教具　前時に仝じ

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法

○新（アタラシイ）　楽斤分解、音漢音吳音「シン」。訓「アタラシ」「ハジメ」。練習「新シイ着物」「新シキ本」

○**エマ**　「繪馬」もとは馬を額面に畫きて、神社佛閣に奉納せり。これは眞の馬を奉つる能はざるに代へしなり。轉じて今はすべて、神社佛閣に奉納する額面の總稱となれり。

○**古イノモ、新シイノモ**　「ノモ」は「ノ」の「もの」の略にして「エマ」の代名詞なり。「前に度々解釋したれば參照すべし」。

第一卷に說明したり參照すべし。

○**ヨシツネ**　(義經)氏は源、幼名牛若丸、義朝の第九子、軀幹短少白晳にして、反齒ありしといふ。神彩秀發にして趫捷人に軼ぐ、兄頼朝と共に、平氏を壇の浦に滅し、武勇絶倫を以て聞ゆ、其終詳ならず。

○**ベンケイ**　(辨慶)熊野の別當湛增の子にして、幼名を鬼若丸と稱す。叡山に登りて西塔に住し、自ら武藏坊と號す。顯密二敎を學び、性不羈磊落、常に好んで武技を修む。義經に從ひて、平氏と戰ひ常に忠君を勵みたり。膂力人を稜ぎ、好て大薙刀を用ふ。軍陣の間、常に木槌、鋸、鎌、斧、鐵棍、鐵搭の七具を擔ひたりといふ。

○**ニタンノ四郎**　名は忠常、伊豆の人、頼朝に仕へ、壽永中範頼に從ひて、平氏を西海に擊つ、武勇を以て、稱せらる。頼朝富士の卷狩の時、荒れたる猪を手取りにせりといふ面白き傳說あり。

(二)文章解剖

(1)オ宮ニハ(副)エマガ(主)タクサン(副)カケテアル(說)。古イノモ(主)新シイノモ(說)アル。

(2)ヨシツネ、ベンケイノエモ(主)ニタンノ四郎ノエモ(主)アリ(說)、

(3)又(接)日本ヘイガロシヤヘイトタ、カツテキルエモ(主部)アル(說)。

教法

(一)前時の復習(內容形式共)をなす。

(二)默讀を命じて大意を問答し、神社に揭けてある繪畫につき內容上の談話をなす。

(三)左の文字、語句、語法を授けて、講讀。

(1)新、エマ、ヨシツネ、ベンケイ、ニタンノ四郎、古イノモ、新シイノモ、

(2)タクサン、又、

(四)文章を左表の如く解剖して、語句の關係、意義の精査をなす。

オ宮ニハエマガアケテアル
- 古ノイモ
- 新シイノモ

アル
- ヨシツネ、ベンケイノエモアル
- ニタンノ四郎ノエモアル
- 日本ヘイガロシヤヘイトタ、カツテキルエモアル。

(五)左の各項につき文字、語句、語法の應用練習をなす。

(1)コノエマハマダ新シイガコチラハ古クナツテキル。

(2)新シイモノハ美シクテ、古イモノハ何デモキタナイ。

(3) ロシヤト日本トタ、カツテキルエモアリ、日本トシナトタタカツテキルエモアル。

(4) 僕ノ本ハ君ノ本ヨリモ新シイデハナイカ。

(5) オ宮ニハタクサンノハトガキル。

(六) 讀本の文章につき達讀練習をなし、且つ口譯せしむ。

第四時

教材 (自六〇頁一行 至七〇頁六行) オ宮ノ裏デハ……話デアル。

要項

內容 ‖ 餘興場の光景、

形式 ‖ 「客」「晩」「スマフ」「ワアツト」「見セ物ゴヤ」「ヤラ」等の文字、語句、語法、修辭法、

教具 神祭餘興場の光景、

教材解釋

形式

(一) 文字、語句、語法、

○客(キヤク) 宀に從ひて寄る意を會せる會意文字、宀各分解、用例「御客樣」「先客」二つの意かある即(1)物を買ひ注文する人(2)訪問し來れる人、

○晩(バン) 日に從ひ暮の意を會せる會意文字、日免分解、用例「朝晩」「明晩」「今晩」もとは日の暮即夕暮の意なりしが轉じて夜の意に用ひらる。

○スマフ ハ行四段活用の自動詞て名詞となつたもの、角力は二人力を鬪はす技。その相當るを俗に取るといふ。

○一番(イチバン) 一回の取組

○ヤラ 「ヤ」…名詞、代名詞につきて、物を並べ擧げる意の天爾乎波、それに、同じ類の音を表はす「ラ」の天爾乎波がつきて、一層その意味を強めたるもの、

○花火(ハナビ) 火藥に鐵粉など、種々の藥品を調合して、竹管に盛り、火を點じて空中に打上げ、種々の色彩と形象とを表はして人に觀覽せしむるもの。

客 ┬ 音 ┬ 漢「カク」
　　 │ 　 └ 呉「キヤク」
　　 └ 訓 ┬「マレビト」
　　 　 └「タビ」「タヨル」

「スマフ」は終止段にて名詞となりたれども古來の慣用なれば差支なし。

●文章解剖

(二)文章解剖

(1)才宮ノ裏デハ（副）今（副）スマフガ（主）ハジマッテキル。（説）勝負ガ（主）一番（副）スムト、（説（副詞節））ワアット（副）ホメルコエガ（主）キコエル。（説）

(2)見セ物ゴヤデ客ヲヨブコエヤラ（補）フエ、タイコデハヤシタテル音ヤラ、（主部）ガ（補）ニ（補）ギャカナコトデ（補）アル。（説）晩ニ（補）ナルト（説（副詞節））花火ガ（主）上ルトイフ話デ（補）アル。（説）

(三)修辭法

○ワアットホメル　「ワアット」は人々のほめる聲をそのまゝ模寫して、活現したるものなれば修辭上、これを寫聲法といふ。

●教法

教法

(一)前時の復習(內容形式共)をなす。

(二)餘興場に於ける光景を談話して、教材の全文を書取らしむ。

(三)客、晩、スマフ、ワアット、コエ、等の文字に注意せしめて、板上訂正を行ひ、講讀、練習をなす。

(四)左の如き設問によりて、文の組立及び、語句の關係を吟味して意義の精査をなす。

(1)お宮の裏ではどんなことがあるか。「ワアット」ほめる聲が聞えるのは何のどうした時か。

(2)「ニギャカナコトデアル」に枠をかけて、何のために賑かてあるか。

(3)「上ルトイフ話デアル」に枠をかけて、何が……何時……

(五)左の各項につき文字、語句、語法の應用練習をなす。

(1)御客、先客、客侍、御客樣。

(2)今晩、明晩、朝晩、サク晩、晩方。

(3)オ宮ノ裏デスマフガアッテ、勝負ガ一番スムトスグワアットホメマス。

(4)花火ノ音ヤラ、カグラノ音ヤラニギャカデアル。

(5)ワアット、ヤアット、グット(修辭法寫聲法練習)。

(六)達讀練習をなし、且つ、口譯せしめて、話方を練習す。

第五時

教材　（全課の總練習）　マツリ。

要項

內容＝神祭の光景、參詣の心得、お宮の有樣、祭の餘興。

形式＝既授文字、語句、語法、修辭法、記事文の形式。

教具　本課教授の際使用したる物一切。

教法

(一)本課の全體につき練習すべき事項は左の如し。

- 內容
  - 神社境內の光景（盛況の想見）
  - 參詣人及び參詣する時の心得（敬神の念）
  - 神社內の裝飾繪馬の種類（公德上の注意）
  - 祭典餘興場の光景（作法上の注意）
  - 附（問答、談話）
- 形式
  - 文字、語句、語法
    - 1、森、着、宮、面、新、客、晩、
    - 2、ノ、ポリ、フダン、サンケイ、正面、エマ、スマフ、花火、ヲガム、
    - 3、ツレラレテ、モウ一ツ、カハル〳〵、コレ、タクサン、ノモ、ヤラ、
  - 附（書取、綴方、應用文の讀解）
  - 文體……敘事的記事文（常體）
  - 文章組織（文段）……追步式（四段）
  - 修辭法……ワアット（寫聲法）
  - 附（讀方、話方、問答）

●綴方

(二)前表によりて概括的練習をなす。

綴方

教材　マツリ

目的教法

(一)讀本第二十二課の文章は、記事文の摸範文として、十分の價

値あるものなれば、その形式を模して記述の練習をせねばならぬ。故に文題は「マツリ」とすれども各地に行はるる祭典の實況を目擊せしめて得たる思想を、この形式によつて記述せしむべし。記述せしむる場合は、讀本第二十二課の文章を通讀して、聞かしむるは勿論、記述の順序を問答して思想を整頓すべし。

(二)讀本第二十二課の文章は、常體に記述しあれば、これを崇敬體の文章に改作せしめて、文章改作の練習をなすも可なり。

(三)第一によりて記述せしめたる場合は簿上訂正を行ひ、第二によりて改作せしめたる場合は朗讀訂正をなして、記帳せしむべし。

第二十三　鹿ノ水カヾミ　(三時間)

要旨及文體

一疋の鹿が、谷川の水に映れる己が姿の他獸に比して、如何にも立派なることを獨語せるうち、獵人の犬に追はれ、その美を誇りし角も、徒らに灌木の枝にかゝつて、却つて、今は身の仇となり、遂に獵犬に捕へらるゝに至れることを、叙したる童話である。徒に自分の美貌を、誇るべからざることを戒めたる教訓的教材であるから、鹿の理科的教授をなすが主眼ではなく、寧文學的教材として取扱ひ、文學趣味の涵養に資すると共に、「鹿」「角」「强」「弱」「匹」「追」「フト」「ツク〳〵」「カリウド」「タクマシイ」「ズン〳〵」「カハイサウニ」「イクラモガイテモ」「ハツレマセン」「トウ〳〵」等の文字、語句、語法等を授けて全文の講讀及び、談話、記述の練習をなすのが主眼である。

區分

第一時（自七〇頁七行至七二頁八行）　第二十三鹿ノ……ホシイモノダ。

第二時（自七三頁一行至七三頁八行）……ソノ時……追ヒツメラレマシタ。

第三時（全課の總練習）

第一時

教材（自七〇頁七行至七二頁八行）鹿ノ水カ、ミ……ホシイモノタ。

要項

内容＝鹿の獨語（水鏡に映れる自己の美を誇りとせしこと）

形式＝「鹿」「角」「強」「弱」「ノマウ」「ツク〳〵」「イカニモ」「モット」等の文字語句、語法、修辭法、獨演體文章の形式。

教具　教科書挿繪の廓大圖、

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法

○**鹿**（シカ）　象文の鹿の字にして、頭角及び四足の形に象りたる象形文字、广出比分解

○**角**（カク）　角の形に象りたる象形文字、ク用　分解

○**弱**（ジャク）　弱弱分解「弱イ男」「力弱シ」「弱クテコマル」音（漢音「ジャク」訓（「ヨワシ」「オトル」）（呉音「ニャク」）（「オサナシ」）

○**強**（キョウ）　弓虽分解「強イ男」「力強シ」「強クテヨイ」音（漢「キャウ」訓（「ツヨシ」「コハシ」「ツトムル」「シヒル」）（呉「ゴウ」）（「ホシヒマヽ」「タフル」）

○**鹿ノミヅカ、ミ**　「鹿」は獸名本名「カ」なり「シカ」といふ語は古は牡（ヲス）の名にて牝を「メカ」と云へり、今は牡牝に通じて「シカ」といふ。

○**ノマウト**　「ノム」は麻行四段活用の動詞第一活段に「ウ」が添ふて未然の意を表はす、即ち齒にてかまずして、すぐに喉に送るをいふ。

○**フト**　「思ひかけず、はからず、などの意の副詞「フト見ルト」「フト氣ガツイテ」。

○**ツク〳〵トナガメテ**　ツク〳〵は物を打ち守る意にいふ副詞にして、善く善く念を入れて「ふら〳〵」などいふに同じ。

○**リツパ**　立派、いかめしくて美しいこと、おごそかに麗はしきこと、「立派な男」「立派な品物」

(二)文章解剖

鹿　音　漢「ロク」　呉「ロク」　訓　「シカ」　「ザホシカ」

角　音　漢「カク」　呉「コク」　訓　「ツノ」　「スミ」　「カド、キソウ」

卷の一に形態性態の説明あり參照すべし。

●文章解剖

(1)鹿ガ（主）水ヲノマウト思ッテ、（副詞句）谷川ノ中ヘ（補）ハイリマシタ。（説）鹿ハ（主）フト（副）水ニウツタシブンノスガタヲ見テ、（副句）アタマカラ足マデツク〳〵トナガメテ、（説）ヒトリゴトヲ（客）ハジメマシタ。（説）

(2)ジブンノ角ハ（主）ジッニ（副）リッパナモノダ、（補説）牛ノ角トハチガッテ（副句）枝ガ、（説明節）アル。毎年（副句）春ニナルト（説）オチル（副句）ガ（接）オチルト（副句）スグ（副）又（副）新シイノガ（主）ハエテ、（副詞節）ソノタビニ（副詞節）枝ガ（説明節）一ツヅツ（副）フエル。

(3)角ノアルケモノモタクサン知ッテヰルガ（補説）コンナリッパナ角ヲモッテヰルモノハ（主）ナイヤウダ。（説）

(4)ケレドモ（接）コノ足ハ（主）細クテ、（副句）イカニモ弱サウニ（副句）見エル（説）出來ルコトナラ、（副句）モット（副）、太クテ強イ足ガ（客）ホシイモノダ。（補説）

(三)修辭法

○ツク〳〵トナガメテ　ツク〳〵はもと善く〳〵念を入れて「つら〳〵」な

●教法

どいへる意の副詞であつたが(例ツク〳〵思フ)こゝは物を打ち守る意より轉じてその態を表はす擬態法の語と見ることが出來る。

教法

(一)下調を命じ、難字、難句は質問に應じて摘書す。

(二)緩讀しながら、摘書の文字、語句、語法の意義、用法を授く。

(三)個讀、齊讀をなさしめて讀方を練習す。

(四)左の如き設問によりて文章の組織、語句の關係を吟味して意義の精査をなす。

(1)「谷川ノ中ヘハイリマシタ」とは何か這入たのか……何しに這入たのか。

(2)「ひとりごとを始めました」とは何が始めたのか……どうして一人ごとを始めたか。

(3)何と獨言を言つたか。

(4)鹿の角及び足につき(挿繪を觀際せしめて)簡單に形態、生態上の問答をなす

(五)左の各項につき、文字、語句、語法等の應用練習をなす。

(1)鹿ノ角ハ毎年春ニナレバオチテ又新シイノガハエテ枝ガフエル。

(2)鹿ノ足ハ小サイケレドモナガイカラカケルニハナカ〳〵ハヤイ。

(3)牛ノ角ニハ枝ハナイガ鹿ノ角ニハ枝ガツイテヰル。

(4)太クテ強イ足ヨリモ細クテ弱サウナ足ガ鹿ノタメニハヨイノダ。

(5)日本男子ハ小サクテモ強イ。弱イ足デモカケルコトハ早イ。

(6)三郎君ガツク〳〵トエホンヲナガメテヰル。

(7)リッパナ品物デモツク〳〵トナガメテ見ルトフトシタトコロニキズガアルモノデアル。

(8)鹿ノ角、強イ足、強イカラダ、弱イ人、

(六)鹿になつたつもりで鹿の獨言を話さしめて、談話の練習をなす。

(七)讀本を讀ましめて達讀練習をなす。

筆順「一ル口」

追
- 音
  - 漢「ツイ」
  - 吳「ダイ」
- 訓
  - 「オフ」
  - 「スクフ」
  - 「シタガフ」

第二時

教材（自七三頁一行至七三頁八行）ソノ時……追ヒツメラレマシタ。

要項

内容＝鹿が身體の自由を失ひて、犬に追ひつめられしこと。

形式＝「匹」「追」「カリウド」「タクマシイ」「ズン〳〵」「カハイサウ」「イクラモガイテモ」「トウ〳〵」等の文字、語句、語法、修辭法。

教具　前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法、

○匹（ヒキ）　四文の意にして、篆文の匹、字、即ち八口に從ふ。俗に疋を以て、匹に代ふるは非なり。用例「一匹」「二匹」　音（漢音「ヒツ」吳音「ヒチ」）訓（「トモガラ」「ダグヒ」）

○追（オフ）　逐の意「犬を追フ」「追フテ走ル」「追々」「追分」

(五)左の各項につき、文字、語句、語法等の應用練習をなす。

(1)鹿ノ角ハ毎年春ニナレバオチテ又新シイノガハエテ枝ガフエル。

(2)鹿ノ足ハ小サイケレドモナガイカラカケルニハチカ〳〵ハヤイ。

(3)牛ノ角ニハ枝ハナイガ鹿ノ角ニハ枝ガツイテヰル。

(4)太クテ強イ足ヨリモ細クテ弱サウナ足ガ鹿ノタメニハヨイノダ。

(5)日本男子ハ小サクテモ強イ。弱イ足デモカケルコトハ早イ。

(6)三郎君ガツク〳〵トエホンヲナガメテヰル。

(7)リツパナ品物デモツク〳〵トナガメテ見ルトフトシタトコロニキズガアルモノデアル。

(8)鹿ノ角、強イ足、強イカラダ、弱イ人、

(六)鹿になつたつもりで鹿の獨言を話さしめて、談話の練習をなす。

(七)讀本を讀ましめて達讀練習をなす。

第二時

教材　(自七三頁一行　至七三頁八行)　ソノ時……追ヒツメラレマシタ。

要項

内容＝鹿が身體の自由を失ひて、犬に追ひつめられしこと。

形式＝「匹」「追」「カリウド」「タクマシイ」「ズン〳〵」「カハイサウ」「イクラモガイテモ」「トウ〳〵」等の文字、語句、語法、修辞法。

教具　前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法、

○匹(ヒキ)　四文の意にして、篆文の「匹」字、即ち八匚に從ふ。俗に疋を以て匹に代ふるは非なり。用例、「一匹」「二匹」　音(漢音「ヒツ」　吳音「ヒチ」)　訓(「トモガラ」「タグヒ」)

○追(オフ)　逐の意、「犬を追フ」「追フテ走ル」「追々」「追分」

筆順　「一」「ル」「口」

追　音　漢「ツイ」　吳「タイ」　訓　「オフ」　「スクフ」　「シタガフ」

○カリウド　狩人「山に獵すること」を業とする者「レウシ」といふに同じ。
○タクマシイ　逞、勢盛なる意の形容詞「逞シイ男」「逞シサウナ士」
○トウ〳〵　「終ニ」「しまひに」などの意の副詞「トウ〳〵ニゲマシタ」「トウ〳〵ヤッツケタ」

(二)文章解剖

●文章解剖

(1)ソノ時(副)　後ノ方(副句)カラ　カリウド(主)ノ來ル音ガ　シタノデ、(主)(説(副詞節))　オドロイテ(副)　カケ出シマシタ。(説)

●主は「鹿ハ」

(2)タクマシイ(主)大キナカリ犬ガ(補)　四五匹(副)デ　オツカケテ(説)來マス。　鹿ハ(主)　輕イ足デ　ズン〳〵(副句)ニゲテ、　林ノ中ヘ(副)　カケコミマシタ。(説)

●主は「鹿ハ」

(3)カハイサウニ(副)　美シイ角ガ(主)　木ノ枝ニ(副詞句)　ヒッカヽッテ　イクラ(副詞節)　モガイテモ　ハヅレマセン。(説)

(4)トウ〳〵(副)　犬ニ(副)　追ヒツメラレマシタ。(説)

(三)修辭法

●教法

○ズン〳〵ニゲテ　「ズン〳〵」は滯りなく逃走る態をうつせるものなれば、修辭法てはこれを擬態法といふ。

教法

(一)前時の復習(內容形式共)をなす。

(二)默讀を命じて、大意の問答をなし、內容をまとめて「うぬぼれ」の戒むべきことを訓戒す。

(1)四、追、
(2)カリウド、　タクマシイ、　カケコム、　カハイサウニ、　モガク、
(3)ズン〳〵、　イクラ、　トウ〳〵、

(四)左の如き問答をなして、意義の精査をなす。

(1)鹿は何故かけ出したか……何時てあつたか、
(2)どんな犬てあつたか……どうして來たか……何を。
(3)鹿はどうしたか……逃げる時どんなことがあつたか。
(4)おしまひにどうなつたか……此時鹿の角に枝がなかつたらどうだ。

(5)鹿の足と角とは逃げる時にはどちらが都合よかりしか。

(五) 左の各項につき文字、語句、語法の應用練習をなす。

(1)鹿が二三匹にげると犬が四五匹おつかけます。

(2)とう〳〵犬が鹿に追ひつきました。

(3)かりうどが鹿をとらへたてせう。

(4)いくら鹿でも、たくましい犬が四五匹もおつかけて來ては、にげのばしまい。

(5)犬が鹿をずん〳〵おつかけました。

(6)太郎さんをおつかけましたら、とう〳〵追ひつきました。

(六) 讀本の文章につき達讀練習をなす。

(七) 讀本を離れて話方を練習す。

第三時

教材 (全課の總練習)鹿ノ水カヾミ

要項及教授上の注意事項 左の如し。

鹿ノ水カヾミ

- 內容
  - 1、一匹の鹿が谷川にはいつて獨言を始めしこと。
  - 2、鹿の獨言
    - 角の美を誇りしこと。
    - 足の不足をかこちしこと。
  - 3、獵師に見つけられて、遂に獵犬に捕へらるるに、至りしこと。(うぬぼれをいましむ)
  - 附、(問答)
- 形式
  - 文字、語句、語法
    - 1、鹿、角、强、弱、匹、
    - 2、タグマシイ、カハイサウニ、モガク、カリウド、
    - 3、フト、イクラ、トウ〳〵、モット、
    - 附(書取、綴方、讀解)
  - 文章
    - 文體叙事體
    - 文の組織……(追步的、三段)
    - 修辭法
      - ツク〳〵ト(擬態法)
      - ズン〳〵(擬態法)
  - 附讀方、話方

●方

綴方

題目　鹿

教法

(一)讀本第二十三課鹿の水かゞみにて教授したる事項の應用練習として、鹿の文題につき說明文をかゝしむべし。

(二)左の各項につき問答をなし、思想を整頓して記述せしむべし。

(1)鹿の住所、

(2)形體(大さ、足、角)

(3)効用。

(三)讀本第二十三課「鹿ノ水カゞミ」の文章につき修飾部を省略して縮約文をかゝしむるも可なり、左に縮約文を示すも兒童の程度によりて加減すべし。

●書方

鹿が水かゞみにちつつたじぶんのすがたを見て、うぬぼれて、ひとりごとをいつてゐた時、かりうどのいぬにおつかけられて、林の中にかけこみました。すると、角が木の枝にひつかゝつて、はづれずに、とう〳〵犬にとらへられました。

書方

教材　着物。表。裏。新。古。强。弱。勝。負。

區分

第一時　着物表裏新

第二時　古强弱勝負

第三時　全部の練習、

第四時　練習及び淸書、

教授上の注意

(一)「着物」「新」は讀本第二十二課「表裏」は讀本第二十一課と聯絡して教授すべし。

(二)「古」は讀本第二十二課「强弱勝負」は讀本第二十三課と聯絡して授くべし。

(三)筆順結構は讀本にて授けたるものと一致せしめて筆法を說明し、一字一畫宛示範して、模書せしむべし。

(四)練習せしむる際は常に机間を巡視して個人訂正をなし、共通の誤謬は板上に示範して訂正せしむべし。

(五)淸書の際は一字宛口唱して書かしめ其終りを同じくし、且兼ねて暗書の出來る樣に練習せしめ置くべし。

第二十四　ひよどりごえのさかおとし(一)(三時間)

要旨及文體

一の谷の合戰の有樣を叙したる記事的叙事文である。一の谷の戰は、壯快なる史的事項として、且つ、一の傳說として、武勇を尙ぶ我國の美談であるから、內容上に於ては史的事實を授けて、勇壯の士氣を涵養し、形式上に於ては「守」「干」「分」「攻」「募」「海」の波打ちぎは」「火のもえたつやうに」「しかし」「てきのふい」「こつそり」等の文字、語句、語法等を授けて、文章の趣味を味はしめねばならぬ。

區分

第一時（自七四頁一行至七五頁一行）第二十四ひよどりごえ……見える。

第二時（自七五頁二行至七六頁六行）げんじは……しまつた。

第三時（自七六頁七行至七七頁五行）この時……けらいにした。

注意　本課は第廿五課習課として一括し、第一課習課となす樣にも總括して各課毎に總習時間を一棘置きに更に總棘習をなし、棘習をなしたる時は、教授の進程を兒童の程度によりて增減すべし。

教材（自七四頁一行至七五頁一行）第二十四ひよどりごえ……見える。

要項

第一時

内容＝一の谷の戰、鵯越の位置。

形式＝「守」「干」「海の波打ぎは」「火のもえたつたやうに」等の文字、語句、修辭法。

教具　一の谷の戰の圖、日本地圖。

教材解釋

内容

○一の谷の戰　（この戰記は、源平盛衰記に見えたるもの委しければ左にこれを抄錄す）。

一の谷は攝津國武庫郡須磨村字西須磨にあり攝播の國境の逼る所海に

こゝは同じく又元暦元年甲辰二月七日の曉、搦手の大將九郎御曹司義經は、鷲尾を先陣として一の谷後、鵯越に向はれしが、矢合せは卯の刻と定めたる故、心は急げども、人馬行惱む難所なれば、暫くはためらひしも事とせずして、打立ちゝ、する程に、一の谷の後なる篠が谷に出でたりける。こゝに、人聲しければ、義經、伊勢三郎、佐藤三郎兵衛の兩人に下知して、之れを探らせたるに、兩人手の者二十余人を引率して行き見れば敵の兵とおぼしきもの百人許あり。義經三郎兵衛の姿を見て聲をもかけず、物がけより散々射たりければ、兩人は大に怒り、ものゝ、しや、平家の雜兵原打ちて頸切り軍神に祭れよとて、大音に叫ぶ。この聲を聞くと等しく和田義盛、畠山重忠、三百余人一度に押し出し、百余人のものどもの中を暇く間に、二三十人を射殺せり。是は、能登守殿この鵯越を甚だ氣遣ひ、若や敵此處に計略を用ゆる事もやと、斥候として番兵をさし置かれしものとかや。かくて源家の將卒共、鷲尾三郎を案内として、岩石を凌ぎ、嶮を攀ぢ、漸く辰の半刻計りに一の谷の上、鉢伏礎の道といふ所に打登り、谷を見下せば、軍陣には楯を突き並べ、矢束を寬げ、山は後、海は前、波も嵐も打合せたは須磨、右は明石、大手の戰は半と見えて、鬨の聲、矢叫の音、山を穿ち、谷を轟し、源平赤白の旗、春風に靡く有樣は、劫火地を燒くかと怪まる。義經、時分はよしと下知すれば、土七八段は小石交りの白砂にて、それより下十五段余は、屏風を立てたるが如く、岩石峨々たれば、皆顏を見合せ扣へたり。然るに、義經は、大鹿毛といふ馬に乘りたるを、佐藤繼信に賜はり、乘替の大夫黑に乘り、岩石をも物ともせず、谷へ打ち向はれ、鹿の通路は馬の馬場ぞ落せ〳〵と勵まされければ、兵士は大將に遲れじと、谷口に乘り向けたり。されど、愈々甚しければ、又々兵士はためらへり。茲に於てか義經辨慶を招き、一は馬

の落様をも見、一は源氏の占形を計らんと、蘆毛の馬に黄覆輪の鞍をかけて、赤旗に準へ平氏とし、二匹の馬を落さしめて見よと、七八段は、小石交りの白砂なれば、轉ぶともなく下り、岩の上に落ち着き、暫くありて又岩の上より轉び下り、越中前司盛俊が陣屋の後に落着、源氏の馬は二聲嘶きて立ち、平氏の馬は身を損じてぞ横たはる。義經兵士を見廻はして、あれ見よ物共、何の難かある、さるにても一に心、二に手綱、三に鞭、四に鎧こそ肝要なれ、虎穴に入らずんば虎子を得ずと、馬を跳せて下りければ、盛俊かくと知盛に注進すれば、陣中大に騒ぎけり。源氏の方は三浦黨の佐原十郎義連畠山重忠を初め、皆々大將に從ひ、我遲れじと、馬を落して難なく平地に着くと同時に、敵の様子を窺へば、何の備へも無かりければ、大將義經下知して、眞先きに進まるれば、三千の兵士同時に鬨を作り、大山の崩るゝが如く、平家の陣に亂れ入り、四角八面に馳せ廻りければ平軍周章て右往左往と散り亂れ、只喚き叫ぶより外ぞなき。こゝに於て、義經辨慶に命じて、平家の陣屋に火を掛けさしむ、白峯の神雲にや、俄に西風烈しく吹き起り、煙八方に飛散し、猛火城の上に吹覆ひし程に、平士の兵は、烟に咽び、火に責められ、皆々叫び迷ふ。この時平家の惣大將内大臣宗盛は、先帝を始め奉り、女院を政所二位殿以下の女房達を誘引し奉り、御船に召して、海上に出で、沖合遙かに漕ぎ出し給ひければ、下郎まで も殘れる船に乘りて、出てける。

形式

(一) 文字、語句

○**守**（マモル）　守る官なり、宀に從ひ寸に從ふ。寺府の事は皆寸に從ふ、寸は法度の意味なり、古文にては寧又は寧に作る。「城ヲ守ル」「國ヲ守ル」「家ヲ守ル」音漢音「シウ」呉音「シユ」訓「マモル」「ツカサ」。

○**千**（セン）　篆文にては仞に作る、十百の意、十の一は東西を表はし、一は南北となし、四方中央備はる指事文。字、「千人」「千萬」「千匹」音（漢「セン」呉「セン」）訓「チヾ」。

○**ふくはらのしろ**　「ふくはら」は攝津の國にあり、平清盛福原の勝地なるを見て別邸を構へ、土木の巧を極めし所。

○**東生田の門**　生田は攝津の福原の東にあり、東生田は東方の生田のこと。

○**波打ちぎは**　「ぎは」は「さかひめ」なり、即ち海の波が岸へ打ち寄する水と陸とのさかひめなり。

○おし立て、「おし」は動詞の上につきて、その動作の意を強むる語なり、用例「波をおし切つて進む」「それからおし及ぼして見ると」「おし計るに」。

○赤はた　平家の軍旗。

○まるで　「ちやうど」「全く」などの意の副詞「まるてだめだ」「まるて役にはたゝぬ」。

(二)文章解剖

●文章解剖

(1)へいけのぐんぜいが（主）　ふくはらのしろを（客）　守つてゐる。（説）

(2)東生田の門から西一の谷の門までの間（主部）　北は山のもとから南は海の波打ぎはまで（主部）　の間（補）　人や馬て（副副節）　ふさがつてゐる。（説）

(3)又（接）　海には一面に（副句）　いくさ船が（主）　ならんでゐて、（説）　海とをかとにおし立てた何千本の赤はたは（主）　まるで（副）　火のもえたつやうに（副句）　見える。（説）

(三)修辞法

○しろを守つてゐる　「ゐる」一の谷の戰は過去に屬することなれどもこれを今現にある事のやうに書表はしてある。かくの如き辭儀を直現法といひ歴史に多く用ふるから、史的現在といふ。

○火のもえたつやうに　（直喩法、前解參照）。

●教法

教法

(一)默讀せしめて、大意の問答をなし、左の各項につき內容の談話をなす。

(1)平氏と源氏の爭。

(2)一の谷及び、鵯越の位置（地圖を示す）。

(3)平家の軍勢（掛圖）。

(二)「守」「千」「海」の波打ぎは」「火のもえたつやうに」等の文字、語句を授けつゝ講讀練習。

(三)左の如く文章を解剖して、文章の組織、意義の精査をなす。

(1)へいけのぐんぜいがふくはらの城を守つてゐる。
- 東…生田の門
- 西…一の谷の門
- 北…山のふもと
- 南…海の岸
- 人や馬てふさがつてゐる。

(2) 次の問答をなして語句の關係を吟味す。
(イ) 海の有樣は如何。(ロ) 海と岡とに立つてゐる旗の有樣は何にたとへてあるか。

(四) 文字、語句、修辭法の應用練習をなす。
(1) 軍人となつて國を守るのは日本男子のつとめです。
(2) へいけのぐんぜいが一の谷の門を守つてゐました。
(3) 海の波打ちぎはまでへいたいをならべてゐました。
(4) まるで水けぶりのやうにある。火のもえたつやうに見えるのはへいけのはたてあと。
(5) 君のいつてゐることはまるでなつてゐない。僕が話すからよくきけ。
(6) 何萬のへいしがゐるようともおしやぶつて進む。

(五) 達讀練習及話方練習をなす。

第二時

教材 (自七五頁二行 至七六頁六行) げんじは……なつてしまつた。

要項

内容＝源氏の軍略、鵯越の險。

形式＝「分」「攻「暮」「しかし」「てきのふい」「すぐつて」「こつそり」「そのうちに」等の文字、語句、語法。

教具 前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一) 文字、語句、語法

○分(ワカツ) 篆文の小字、即ち八に從ひ刀に從ふ、刀は物を別つものなり八は二つに別れたるに象る、因て會意文字、音(漢「フン」訓「ワカツ」「ヘダツ」「アタフ」「物を分ツ」「追分」呉「ブン」)

○攻(セム) 篆文の攻字、攴に從ひて擊つ意の指事文字、本字は攻、俗に攻とかくは非なり。音(漢「コウ」訓「セムル」「ヲサム」「ル」「ウツ」「火攻」「攻めやぶる」「攻めとむ」呉「クウ」)

○暮　篆文の𣅀字、即日が草に隱るゝを象りて日沒の意を會せる會意文字「日暮」「夕暮」「年の暮」音（漢「オ」訓「クル、」「ヒクレ」「クラシ」「呉「モ」）

○しかし　上の語の意外を下に述べる意の接續詞「これは美しいがしかしわりにねだんが高い」

○敵のふい　「相手の思ひかけないこと」「ふいに來てはこまる」「ふいをおそはれた」。

○すぐつて　「すぐる」は「選ぶ」意の良行四段活用の他動詞「兵をすぐる」「品物をすぐる」。

○こつそり　人知れず物事をなす狀にいふ副詞「そつと」に同じ「こつそりぬすんだ」「こつそり來た」。

●文章解剖

(二)文章の解剖

(1)げんじは（主）二手に（副）分れて（説）（副詞節）、のりよりのぐんぜいは（主）東の門へ（副）向ひ（説）、よしつねのぐんぜいは（主）西の門へ（副）向つた（説）。

(2)しかし（接）よしつねは（主）「表から攻めおとすことは（主）むづかしい（説）。何でも裏からまはつて（主）てきのふいをうたなければならぬ」と（説）考へて（副詞節）、強いものばかり（客）三千人を（副）すぐつて（説）（副詞句）、こつそりと（副句）裏道から（副）ひよどりごえに（説）向つた（説）。

(2)この中には（主）べんけいも（主）居つた（説）。

(4)ひよどりごえは（副詞節）しろの北の方にあつて、（副）よつぽど（補）けはしい所である（説）。

(5)ふだんは人も通らない道だから、（主）どこをどう行つてよいか（副詞句）分らない（説）。

(6)そのうちに（副）日が（主）暮れて（説）（副詞節）、（主）まつ暗に（補）なつてしまつた（説）。

●教法

教法

(一)前時の復習をなす。

(二)左の文字、語句、語法を授けて講讀。

(1)分、攻、暮。

(2)てきのふい、強いものばかり、すぐつて、こつそり、けはしい。

(3)しかし、この中に、そのうちに。

(三)內容の整理（談話問答）。

(1) 源氏の軍略。
(2) 義經の作戰。
(3) 鵯越の要害險阻。

(四) 文章の組織及び、意義の精査(問答の結果を左の如く板書す)。

(1) げんじは二手に分れた(のりよりのぐんぜい…東門 / よしつねのぐんせい…西門)

(2) よしつねは 表からは困難だ 裏からてきをうたねばならぬ、 と考へて、 強いものばかり三千人をすぐつて、うらみちから ひよどりごえに向つた。

(3) ひよどりごえ(北の方に山……けはしい所 / 人も通らない道……行く先が分らない)

(五) 左の各項につき文字、語句、語法の應用練習。

(1) のりよりとよしつねとは二手に分れてすゝみました。
(2) げんじは二手に分れて東門と西門を攻めました。
(3) よしつねはべんけいをつれてひよどりごえの裏からまはつてへいけを攻めました。
(4) 夕暮、日の暮れるころ、年の暮。
(5) 表から攻めても勝つのだ。しかし、こんなんだから裏から攻めませう。
(6) 太郎は、東から攻めた。しかし、僕は西から攻むる方がべんりだと思ふ。
(7) ねこがこつそり出て來て魚をぬすんだ。
(8) へいけのぐんぜいはふいに攻められてこまつた。

(六) 讀本の文章を讀ましめて達讀練習。

(七) 左の各項につき問答して、話方を練習す。

(1) 源氏の軍略は如何。
(2) 義經の作戰は如何。
(3) 鵯越は如何なる場所か。

第三時

教材(自七六頁七行 至七七頁五行) この時……けらいにした。

要項

内容＝義經かりうどを臣として、道案内を命ぜしこと。

形式＝「丈」「たより」「たづね」「かりうど」「たくましい」の文字、語句。

教具　前時に仝じ

教材解釋

形式

(一)文字、語句

○**丈**（タケ）　第六課にて「ヂャウ」と讀むこと既習「君は僕よりは丈が高い」「丈の低い男」。

○**たより**　「それを頼みにすること」「父をたよりにたづねて來た」「一人の兄をたよりにしてゐる。

○**たづね**　「たづねる」は次の如く四つの意に使用せらる。

(1)物事の見えぬ知られぬを探る、さがす意　例「それをたづねたが見えなかつた」。

(2)問ふ聞き正す意　例「その事について詳しくたづねた」

(3)物事の跡を求め行く意　例公園へ行く道をたづねた」

(4)オトツル、意　例「昨日友人をたづねた」

こゝの場合は(1)の場合である。

(二)文章解剖

(1)この時（副）・べんけいは（主）火の明りをたよりに（副詞句）たづねて行つて（副詞句）、一人のかり（客）うどを（客）つれて來た（補）。（説）

(2)見ると（副）主丈の高いたくましい男（副詞節）である（説）。手には（副）かりに使ふ弓矢を（客）持つてゐる（説）。「年はいくつか」と問へば（副）主「十七」（補）と答へた（説）。

(3)よしつねは（主）よろこんで（副）刀やよろひをやつて（副句）げらいにした（補説）。

(三)修辭法

○**十七**　は十七歳です　といふべきをかく省略したるなり。かゝる詞態を省略法といふ。

教法

(一)前時の復習(內容、形式)をなす。
(二)內容の談話をなして、全文を聽寫せしむ。
(三)「丈」「弓矢」「問へば」「よろひ」「けらい」などの文字、假名遣に注意せしめて板上訂正をなす。
(四)個讀、齊讀をなさしめて讀方を練習し、左の如き問答をなして意義の精査をなす。
(1)「一人のかりうどをつれて來ました」に枠をかけて誰が……どうしてつれて來たか。
(2)「たくましい男である」に枠をかけて何故に……誰れが。
(3)「弓矢を持つてゐる」に枠をかけて誰れが……何處に持つてゐるか……どんな弓矢か。
(4)「答へた」に枠をかけて何と答へたか……誰か……何故答へたのか、誰れが尋ねたか。
(5)「けらいにした」に枠をかけて誰を……誰れが……どうしてけらいにしたか。
(五)左の各項につき文字、語句の應用練習。
(1)丈の高い男とひくい男。
(2)おとうさんをたよりにして、たづねて行きました。
(3)君の年はいくつかとたづねたら十一と答へた。
(4)刀やよろひをもらつて、けらいになりました。
(5)かりに使ふ矢を持つてゐました。
(六)讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなし且つ、話方を練習す。

綴方

題目　ひよどりごえ。

教授上の注意

(一)讀本第二十四課ひよどりごえのさかおとしにて教授した

る事項の應用練習として、記事文をかゝしむべし。

(二)記述の事項、順序は左の各項に準し、思想の整頓をなして記述せしめ、板上訂正をなすべし。

(1)ひよどりごえの位置。(2)地勢。(3)歴史上の事項。

第二十五　ひよどりごえのさかおとし(二)　(三時間)

要旨文體

委しく第二十四課に説明したが、形式上の「阪」「間」「下」「東西」「軍」「進」「城」「まつさい中」「こゝぞ」「さしづ」「すくんで」「どつと」「さん〳〵」等の文字、語句、語法等は特に本課に於て練習せねばならぬ。

區分

第一時(自七七頁八行至八〇頁四行)　よしつねは……まつさい中である。

第二時(自八〇頁五行至九二頁一行)　へいけ方は……やぶられた。

第三時(自第二十四課至第二十五課)　全課の總練習、

教材(自七七頁八行至八〇頁四行)　よしつねは……まつさい中である。

要項

第一時

内容＝鵯越の壯觀、義經の武勇。

形式＝「阪」「間」「下」「東西」とても「をり〳〵」「まもなく」「まつさい中」等の文字、語句、語法。

教具　教科書挿繪の廓大圖。

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法。

○阪(サカ)　篆文の𨸏字にして、偏は土山の形に象りたる象形文字、傍は其の音を表

聞類門間澗間似と

はす諧聲文字、音「漢「バン」呉「バン」」訓「サカ」「ケハシ」「阪田」「小阪」「松阪」

○聞（キク）　篆文の𦣞字、門は二の戸を象りたる入口の意をなし耳はその形を象りたるものにして、即ち聞く意を會せる會意文字、音「漢「ブン」呉「モン」」訓「キク」「マヲス」

○下　「クダル」「シタ」と讀むこと既習。「金下し」「荷物を下す」

○東西（トウザイ）　「ヒガシ」「ニシ」と讀むこと既習「東京」「西京」「東洋」「西洋」

○とても　いかやうにしても、どんなにしても、の意の副詞にして口語にては下に必ず打消の意の應ずるを常とす。例「とても行けない」「とてもかけない」

○をり〳〵　物事のまれに起る意の副詞「とき〳〵に」といふに同じ「をり〳〵來る」「をり〳〵さく」

○まつさい中　「眞の最中」「まさかり」などの意、

(二)文章解剖

(1)よしつねは（主）まづ（副）たづねた。（述）

(2)こゝからうしろの方へ下りることが（主部）出來るか」（述）

それは（主）とても（副）出來ません。（述）しろの後は（主）けはしい阪で（副句）あつて（副詞句）馬の（述）

補　通れる所では　ございません。　説

(3)「鹿は　どう　だ。」
主　副　説

(4)「鹿は　をり〳〵　通ります」
主　副　説　副句

(5)よしつねは　これを聞くと、
主

「鹿も　四足てある　なら　馬も　四足てある　だ、　鹿と馬は　つめが　わ
主　補説　説明節　主　補説　副　主　主

れてゐると　ゐないだけのちがひだ。」
補説　説　主部

ことが　あるものか。　さあ　あんないを　せよ」と　言ひつけて、　夜のう
説　獨立語　客　説　副詞節　副詞

ちに　がけの上まで　出た。
副　説

(6)まもなく　夜が　明けた。　見下せば、　しろは　何十丈あるか知れないがけ
主　説　副　主　補

の下に　ある。　東西の二門は　今　いくさのまつさい中である。
説　主　副　補説

教法

(一)前時の復習(內容形式共)をなす。

(二)默讀を命じ、大意の問答をなして、左の各項につき內容をまとむ。

(1)道案內と　經との問答の內容、

(2)義經の決心、武勇、

(3)鵯越のがけの上から城中をながめた光景、

(三)左の文字、語句、語法の書方及び、意義、用法を授けて、講讀練習。

(1)阪、間、下、東西、

(2)とても、をり〳〵、まつさい中、

(四)道案內者と義經とに擬して對話の練習をなさしめ、語句の關係及び、意義の精査をなす。

(五)左の各項につき文字、語句、語法の應用練習をなす。

(1)よしつねのぐんぜいが阪。道をかけのぼりました。

(2)阪田、阪上、小阪、野阪

(3) 一の谷のたゝかひの御話を聞きました。
(4) ひよどりごえはけはしいから阪を下るのもなか〳〵こんなんです。
(5) とても下ることは出來まい。とても私には書けませぬ。
(6) 太郎君がぎり〳〵あそびに來て一の谷のたゝかひのお話をしてくれます。
(7) 君もぎり〳〵は僕のうちにいらつしやいよ。

(六) 讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

第二時

教材 (自八〇頁五行至八二頁一行) へいけ方は……やぶられた。

要項

内容 ＝鵯越のさかおとし、義經の武勇、平家の敗北、

形式 ＝「軍」「進」「城」「へいけ方」「攻めこまう」「こゝぞ」「さしづ」「すくんで」「どつと」「さん〳〵」等の文字、語句、語法、

教具 前時に仝じ。

教材解釋

形式

(一)文字、語句、語法

○軍（グン）　篆文の軍字なり車は兵車の象形にして一はこれを包むに象る、即ち「たひろ」の形文字なり。音（漢「クン」呉「グン」）訓「イクサ」「タムロ」用例「勝軍」「軍事」、

○進（ススム）　篆文の𨑓字なり、辵は走り行く意を表はし、隹は鳥の象形なり、即ち、登意を會せる會意文字。音（漢「シン」呉「シン」）訓「スヽム」「ノボル」「ツクス」用例「馬ヲ進ム」「學問ガ進ム」

○城（シロ）　篆文の城、城字なり、偏は土の象形にして、傍はその音を表はす、諧聲文字、土成分解　音（漢「セイ」呉「ジャウ」）訓「シロ」「キヅク」「サカン」用例「城山」「城川」「岩城」「大阪城」

○こゝぞと　「ぞ」はこれと指して意を強めていふ天爾乎波なり。「こゝ」は力の入れ所だよ」

○さしづ　「物事を云ひつけて行はしむること」「先生がさしづしてかゝしむ」「兵をさしづす」

○すくむ　おそれちゞみて動かざる意、麻行四段活用の自動詞なり。

○どつと　衆人一齊に高く聲を出すに用ふる語、即ち「どつと笑ふ」「どつと叫ぶ」「甚しく」「殘る處なく」などの意の副詞「さん〳〵にやぶれた」「さん〳〵にげた」

(二)文章の解剖

(1)へいけ方は（主）　がけの上から（副句）　てきの軍ぜいが（主）　攻めこまうとは（説）　ゆめにも（副）　思はない。（説）

(2)よしつねは（主）　こゝぞと思つて（副句）「進め〳〵。」と（客）　さしづを（説）　した（接）　が馬も（主）　こはがつて（副）　すくんでしまひ、（説）　人も（主）　顔を見合せて（副詞句）　進まうとは（補）　しない。（説）

(3)この時（副）　よしつねは（主）　「われを手本にせよ」と言ひながら（副詞節）　馬に一むちあてゝ（副句）　かけ下りた。（説）　これを見た三千の軍ぜいは（主）　どつと一時にかけ下りて（副句）　城の中へ（補）　攻めこんだ。（説）

(4)へいけは（主）　ふいをうたれて（副句）　どうすることも（補）　出來ない。（説）　三方から（副詞句）　攻めたてられて（副）　さん〳〵に（副）　うちやぶられた。（説）

(三)修辭法

○どつと一時に　「どつと」は衆人の一度に出す大聲をそのまゝ寫したのである。修辭上ではこれを寫聲法といふ。

教法

(一)前時の復習(內容形式共)をなす。

(二)默讀を命じ大意の問答をなして、左の各項につき內容をまとむ。

(1)平家方の不意

(2)人馬の恐怖

(3)義經の武勇、

(4)平家の大敗(一の谷合戰の圖提出)

(三)「軍」「進」「城」「こゝぞ」「さしづ」「すくむ」「どつと」「さん〳〵」等の文字、語句、語法を授けつゝ、講讀練習をなす。

(四)左の如き問答をなして、文の組立、語句の關係、意義の精査をなす。

(1)攻めこまうとはゆめにも思はないに枠をかけて何が……何處から……誰れは。

(2)よしつねはさしづをしたが(馬はすくんでしまひ、人は進まうとはしない、)

(3)よしつねは何といつてかけ下りたか……どうしてかけ下りたか。

(4)三千の軍ぜいはどうしたか……どこにかけこんだか。

(5)平家はどうしたか……何故どうすることも出來ないのか。

(6)打ちやぶられたのは誰れか……どうして打ち破られたか。

(五)左の各項につき文字、語句、語法の應用練習をなす。

(1)「勝軍」「軍事」「軍男」「軍中」「日本軍人」「軍かん」「軍き」

(2)學問が進む、兵士が進む、前へ進め、

(3)城山、城田、城川、山城、岩城、城を守つてゐる。

(4)こゝぞと思つて一ぱいの力をだしてかゝりました。

(5)一ぺん頭をたゝかれたらこわくなつてすくんでしまつた。

(6)一同がどつと笑ひ出しました。皆がどつとかけこみました。

(7) さん〳〵にやぶれました。さん〳〵負けてにげました。

(8) 先生が「僕を手本にせよ」とおつしやいました。

(六) 讀本の文章を讀ましめて、達讀練習をなす。

(七) 本を離れて話方を練習す。

第三時

教材 (自第二十四課至第二十五課) 全課の總練習

要項

内容 ＝鵯越のさかおとし、義經の武勇。勇壯の士氣。

形式 ＝既授の文字、語句、語法、修辞法及記事文の形式、對話の練習。

教具 本課教授の際使用したるもの一切、

教法

(一) ひよどりごえのさかおとし(一)(二)の文章を各節各段又は、全部を通讀せしめて讀方を練習す。

(二) 各節、各段に於ける内容を問答しつつ、要項を板書して、文段の練習をなす。

(三) 全篇の主想を問答して、左の一文に縮約せしむ。

ヨシツネハヒヨドリゴエノカゲカラサカオトシニ一ノ谷ノ城ニカケコンデ、ヘイケ方ノ軍ヲサン〳〵ニウチヤブツタ。

(四) 左の文字、語句、語法、修辞法等につき(書取、綴方、讀解)練習す。

(1) 守、手、分、攻、暮、丈、阪、間、下、東西、軍、進、城、

(2) てきのふい、こつそり、まつさい中、さしづ、こゝぞ、すくんで、波打ちぎは、

(3) さん〳〵、しかし、

(4) どつと、火のもえたつやうに、

(五) 達讀練習をなす。

(六) 本を離れて話方練習をなす。

綴方

題目　ひよどりごえの『さかおとし』。一の谷のたゝかひ、

教授上の注意

(一)讀本第二十四課及び、第二十五課にて授けたるひよどりごえのさかおとしにつき讀本總練習にてなしたる如く主想を問答して縮約せしめ、又縮約文を更に敷衍したりして練習すべし。

(二)文題を一の谷の戰としたる場合は、記述の大體を指導して、自作文をかゝしむべし。

(三)第一の場合は板上訂正を行ひ、第二の場合は薄上訂正を行ひ、淸書せしむべし。

書方

教材　見ると丈の高いたくましい男である。手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる。年は十七と答へた。

區分

第一時　見ると丈の高いたくましい男である。手にはかりに使ふ弓矢を持つてゐる。年は十七と答へた。

第二時　全部の練習、

第三時　練習及び淸書、

第四時

教授上の注意

(一)讀本二十四課ひよどりごえのさかおとしと聯絡して讀方及び意義を授くべし。

(二)第一時に於て全文の讀方及意義を授け、見、丈、高、男、手等の既習文字の書方を練習して、文字の配置に注意せしめて練習すべし。

(三)第二時には讀方、意義を復習して、使、弓、矢、持、年答等の既習文字の書方を練習し、文字の配置に注意せしめて練習せしむ。

(四)各時間とも机間巡視個人訂正を行ひ、共通の誤謬は板上に示範して訂正を行ふべし。

(五)清書の際は一句宛口唱して書かしめその終りを同じくすべし。

附錄

▲本卷に現はれたる漢字

▲第　▲御　▲戸　▲同オナジ(既習)　▲笑ひ　▲春　▲里

▲野　▲鳴く　▲皇天皇　▲御オン(既習)　▲烏　▲金金し

▲國　▲谷　▲間　▲平　▲美し　▲通る　▲畠　▲車

▲兩がは　▲重い　▲輕い　▲寺　▲丈　▲尺　▲寸　▲指

▲池　▲鯉　▲枚　▲蟲　▲食ヒヤス　▲流　▲上ウヘ(既習)

▲祝フ　▲用　▲取つて　▲持つて　▲切つて　▲待ち

▲住んで　▲釜　▲前　▲使つて　▲役役人　▲考へて　▲

後　▲實　▲升　▲合　▲土ツチ(既習)　▲氣　▲會　▲茶

▲葉　▲種　▲番　▲蝶　▲黑　▲原　▲集めて　▲皇后

▲樣　▲姓　▲汽車車(既習)　▲切符　▲荷物物(既習)　▲間アヒダ(既習)

▲時間アヒダ(既習)　▲文　▲道　▲向フ　▲音　▲急　▲明

ル　▲暗ク　▲吉　▲遠く　▲近く　▲先生　▲顏　▲

僕　▲瓜　▲西瓜　▲形　▲平タイラカ(既習)　▲他　▲黃

▲生セイ(既習)　▲廣ク　▲仲仲間　▲中ナカ(既習)　▲勝チ　▲

負ケ　▲勝負　▲穴　▲空　▲炭　▲油　▲後アト(既習)　▲

金コン(既習)　▲打火打石　▲木炭キ(既習)スミ(既習)　▲石イシ(既習)　▲船

汽船フネ(既習)　▲油石油　▲地　▲鈴　▲夜ヨル(既習)　▲秋　▲讀

んで　▲書いて　▲習ひ　▲話　▲裏　▲表　▲森　▲着

着物▲寓▲面正面▲新▲客▲晩▲鹿▲角▲弱

▲強▲匹▲追▲守つて▲干▲

分れて▲攻め▲暮れて▲丈▲阪▲聞く

▲下せば（既習）▲東西（既習）▲軍ぜい▲進め〳〵

▲城

▲漢字の總練習

(一)右表によりて、假名を附せずに讀方の練習をなすべし。

(二)右表の漢字を使用して、普通の地名、人名、短句、短文等を綴らしめて應用練習をなすべし。

(三)屢書取をなさしめて記臆を確實ならしむべし。

尋常小學國語教授細案卷五終

小學教材
618

尋常小學國語教授細案卷五

定價金六拾錢

明治四拾參年貳月五日印刷
明治四拾參年貳月八日發行

普通教育研究會 編纂

發行者 松邑孫吉 東京市京橋區南鍛冶町一番地
印刷者 青木弘 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社 秀英舍第一工場 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

關東發賣元 東京市京橋區南鍛冶町 三松堂
關西發賣元 大阪市東區備後町四丁目 寶文館

618